



スキルアップではなく、 「生き方」を考える

地球貢献型リーダーズ

情熱に巻き込まれて学んだ
事業の作り方

DIC 株式会社 新事業統括本部
事業企画部マネージャー

吉次 優子氏 他

L-UNIV. 人材開発論

自分の『当たり前』を逆流させ、
常識を変える

特別インタビュー

創業期ベンチャー伴走の本質を追求し、
社会実装を先導するジャーネーションカレッジ

株式会社リバネスクピタル 代表取締役社長 池上 昌弘

2024年開講コース受講者募集中！

新規カレッジ設立企業募集中！

L-UNIV. Magazine vol.02

■ リバネスユニバーシティとは

- 03 リバネスユニバーシティ設立の思い
- 04 人づくりを通じて地球貢献を実現する
- 05 「御社・弊社」の垣根を越えて、本気で地球貢献をビジネスにする
- 06 リバネスユニバーシティの学びの特徴

■ 地球貢献型リーダーズ

- 08 情熱に巻き込まれて学んだ事業の進め方
DIC 株式会社 新事業統括本部 事業企画部 マネジャー 吉次 優子 氏
- 10 地域の持続的な発展のプレイヤーとしての銀行員の活躍を目指して
株式会社中国銀行 地方創生SDGs推進部 次長 武田 憲和 氏

■ 特別インタビュー

- 11 創業期ベンチャー伴走の本質を追求し、社会実装を先導するジャーミネーションカレッジ
株式会社リバネスキャピタル 代表取締役社長 池上 昌弘
- 14 新コースピックアップ 資金の出し手が主体的に汗をかき 投資先の成長を促す
「ファイナンスブリッジコミュニケーターコース」

■ L-UNIV. 人材開発論～誰もがコトを起こすリーダーになれる

- 15 自分の『当たり前』を逆流させ、常識を変える

■ リバネスユニバーシティのコース

- 16 アセットをフル活用し、プロジェクトを生み出す「カレッジ」
- 18 2024年度開講コース一覧
- 20 生まれたプロジェクト
- 22 「パートナー企業」を募集しています

L-UNIV. Magazine 編集部

編集長 楠 晴奈
編集 立花 智子、渡辺 桂子、海浦 航平
記者 環野 真理子、望月 史子
発行人 丸 幸弘
発行元 リバネス出版(株式会社リバネス)
東京都新宿区下宮比町1番4号
飯田橋御幸ビル5階
TEL:03-5227-4198
FAX:03-5227-4199

表紙・DTP 高杉昭吾デザイン事務所



リバネスユニバーシティ 設立の思い

地球貢献型リーダーを育成する

環境破壊、気候変動、あるいは経済格差など、世界には大規模かつ複雑な課題が山積しています。それらの原因をシンプルに表現することはできません。しかし、いずれの課題においても共通する要素が一つあります。それは「バランスが崩れている」ということです。つまり、いかにして「調和」を実現するかが、解決の鍵となります。

調和を実現するための「正解」はまだわかりません。しかし、「異なるもの同士の分断をなくすこと」がこれからの時代において非常に重要なスタンスになるはずで、「会社のために」「業界のために」「地域のために」といった分断した視点から一旦距離を置き、あるいは「人類のために」という視点すら超えて、「地球のために」という極めて広い視野で物事を考える必要があるのです。

そうした概念を習得し、広い視野を備えた地球貢献型リーダーを育成すること。それがリバネスユニバーシティの最終的な目的です。

2021年のリバネスユニバーシティの設立に当たり、私達が最初に手掛けたのは「地球のために」という視点で、人材育成の場をつくることです。それは、「個人の成長のため」「会社の成長のため」といった閉じた育成ではなく、答えを知っている先生がいるわけでもなく、これからの地球に必要な人材について考えながら組織も業界も年代も関係なくオープンに学び合う場です。

そして、各コースで助成金の仕組みが立ち上がり、この学びの場に参加したスタッフ・受講生たちによる、ベンチャー設立や組織の新規事業創出という枠組みに囚われない、「創業」へのチャレンジが始まっています。

「分断をなくす」ことは多様性をなくすことではありません。むしろその逆であると私達は考えています。全く異なる価値観、思考、専門性を持った人同士が熱を持ってぶつかり合い、化学反応が起こる。それによって新しい化合物が生まれエントロピーが増大するのではないのでしょうか。それこそが、大規模で複雑な課題を解決する突破口になるはずで。

リバネスユニバーシティは「人の変化・成長」を通じて科学技術の発展と地球貢献を実現する方法を模索し、自ら新しいプロジェクトを仕掛けていきます。

この壮大な「実践場」への参加を、お待ちしております。

「実践場」をつくるリーダーの Vision

リバネスユニバーシティーの場を開発するプロデューサーやボードメンバーそれぞれの思いやビジョンを紹介します

人づくりを通じて 地球貢献を実現する

リバネスユニバーシティー プロデューサー

株式会社リバネス 人材開発事業部 部長 楠 晴奈

2003年よりリバネスに参加。教材開発事業部、教育開発事業部、人材開発事業部の部長を経て2016年研究キャリアセンター長に就任。リバネスの教育応援プロジェクトの立ち上げ、企業の教育参加を加速する教育CSR事業の創出に関わる。また、リバネスの人材開発の根幹となるサイエンスブリッジコミュニケーター育成を主軸とした企業・大学の人材育成プログラムの開発・実施経験を豊富に持つ。著書『誰もが「地球貢献型リーダー」になれる思考法(リバネス出版)』



これからは 誰もがコトを仕掛ける時代

世界は大きな変化のときがきている。これは私だけでなく、皆さんも感じていることではないでしょうか。この大きな変化の中で、これからは、誰もが事を仕掛けることが当たり前になる時代がきます。これまで、組織の中において新しい事を仕掛けるのは一部のみに限られていました。しかし、今後は誰もが事を仕掛ける時代です。意欲や能力のある人材を発掘するのではなく、全ての企業、組織が、「事を仕掛ける人材をどのように育てるか」を考える時代がくるのです。では、どのように育成すればいいのか。どのような人材育成が必要になるのか。我々は、「スキルアップさせること」ではなく、「哲学を持ち、自分の生き方を決めること」が必要だと考えています。その組織の中で求められることをやるのではなく、「これをやるために、この組織の一員として貢献する」という思考です。しかし、社会人になるとそのような教育を受ける機会は殆どありません。

全く異なる文化を通して 概念シフトが加速する

一企業、一組織といった同質な文化の中では、個の考えを磨き「自分がこれをやる」

という柱を立てることは容易ではありません。だったら、全く異なる文化の中で多様な人の常識に触れ、仕事の枠にとらわれずに挑戦できる場をつくれればいいのではないだろうか。事に仕えるのではなく、事を仕掛けるといった「仕事」の捉え方や、競争ではなく共生の発想でビジネスを考えるといった、全く異なる文化の中での活動を続けていくことで自分の当たり前が変わっていきます。他にも、工場での生産や、銀行等における投資、あらゆる人が集まる駅の「当たり前」が変わったら、結果としてどんな変化が起こるでしょうか。あらゆる仕事に概念シフトを起こす人材を育成することができれば、誰でも自分や周りの固定概念を変え、新しい事を仕掛けていけるはずです。

多様な企業とともに 「カレッジ」をつくる

リバネスユニバーシティーでは、「地球貢献型リーダーを育成する」という目標を掲げ、年間200ものプロジェクトを仕掛け続けているリバネスのノウハウをカリキュラム設計に反映させています。「異なる存在との間に橋をかけて両者をつなぐ『ブリッジコミュニケーション』の考え方を学ぶ」「組織の枠を超え、地球貢献を目的

にテーマを創出する」「先生はいない。自ら考えて実践する」これらはごく一例ですが、いずれもリバネスユニバーシティーが概念シフトを加速する実践場であり続けるために、参加者と共有していることです。こうしたリバネスユニバーシティーの考え方に賛同し、一緒に学びの場を作ろうと言って下さるパートナー企業が徐々に増えてきました。その最初の1社が、東日本旅客鉄道さんです。「組織のためという概念を超えて、地球のために、共にひとつの場を創ろう」という思いのもと、2021年に「JRE Station カレッジ」は開校しました。開校から2年が経ち、さまざまな企業から受講生が集まり、サステナブルビジネスの創出に挑戦し続けています。これからも、そんな企業カレッジを多様な企業とともに作り、未来の人づくりを実践していきます。



「御社・弊社」の垣根を越えて、 本気で地球貢献をビジネスにする

JRE Station カレッジ カレッジ長

株式会社リバネス 代表取締役社長CCO 井上 浄

博士(薬学)、薬剤師。株式会社リバネス創業メンバー。博士課程を修了後、北里大学理学部助教および講師、京都大学大学院医学研究科助教を経て、2015年より慶應義塾大学先端生命科学研究所特任准教授、2018年より熊本大学薬学部先端薬学教授、慶應義塾大学薬学部客員教授に就任・兼務。研究開発を行いながら、大学・研究機関との共同研究事業の立ち上げや研究所設立の支援等に携わる研究者であり経営者。

2025年、価値観が変わる 転換点を迎える

2025年、非常に大きなことが起きます。皆さん、何かご存知ですか？ 予言ではなく、数字に裏付けされた事実です。2年後、日本の労働人口の半分以上を「ミレニアル世代以降(1981年以降生まれ)」が占めるようになります。ミレニアル世代以降。当たり前前にデジタルを使いこなし、「サステナブル」「シェア」という言葉を常に意識し、世の中の課題を解決することに高い興味を示す世代です。この世代が労働人口の過半数を占めるようになると、日本人の価値観も大きく変わるはず。価値観が変わる流れの中で、ビジネスも従来の「競争型」から「共生型」へ変える必要があるのではないのでしょうか。

競争型から共生型の ビジネスへ

共生型ビジネスは、「いかに課題を解決するか」という考えを起点にしています。課題を解決するためには、これまでになかったビジネスモデルを生み出し、結果として市場を自らつくる。また、自社のアセットは、独占して使うのではなく、課題解決のためにオープンにして他社と組み

合わせる。つまり、他社に対する考え方も「いかに倒すか」ではなく、課題解決のために「いかに仲間にするか」に変わる。これが概念シフトです。ちなみに、従来の「いかに売上をあげるか」という考え方も、もちろん必要です。私は経営者として、当然この意識をもっています。しかし、これだけではなく、もう1つの軸として「共生型ビジネス」という意識ももつべきだということです。異業種・異分野の社会人が集い、「先生はいない。正解もない。自ら思考し、自分で決めて、実践する」「所属している組織の業種、肩書き、立場、文化は関係ない」というポリシーの下、個々人の情熱を起点としたプロジェクトの創出に取り組みます。とにかくやってみる、という経験を通じて概念シフトの起こし方も学べる仕組みになっています。

生まれてから死ぬまでをつなぐ 「ライフテックコース」を創設

2023年度後期、私がカレッジ長を務める「JRE Station カレッジ」では新たに「ライフテックコース」を設立しました。新設したライフテックコースのプロデューサーは、私が務めています。冒頭で自己紹介を割愛しましたが、私はリバネスの経営者で、同時に免疫の研究をしている研究者で

もあります。薬学で博士号を取得、熊本大学薬学部や慶應義塾大学薬学部で教鞭もとっている、研究が大好きな人間です。「豊かに暮らす人生を設計するために必要となるテクノロジーは何だろう」という問いが、ライフテックコース新設のきっかけです。ライフテックコースでは、「生きる×テクノロジー×ビジネス」を掛け合わせ、生まれてから死ぬまでをつなぐサステナブルビジネスを、皆さんと一緒に作っていきたくと思っています。先ほどお話しした通り、「先生」はいません。お互いに学び合って、アセットを出し合って、一緒にサステナブルビジネスをつくりましょう。概念シフトした時に何ができるのか、そのチャレンジと一緒にやってみませんか。「御社・弊社」ではなく、皆さんと一緒に、地球貢献をビジネスにするということの本気でやりたいと思っています。皆さんの参加をお待ちしています。

スキルアップではなく 概念シフトを起こす

リバネスユニバーシティ

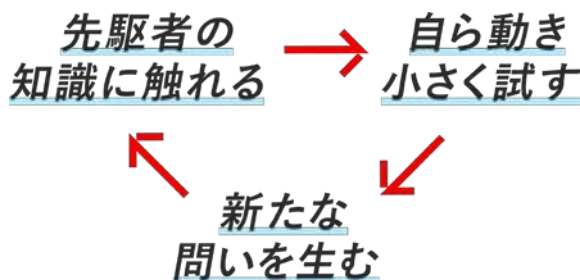
「地球貢献型リーダーを育成する」をビジョンに掲げ、多様な組織の人材が集まり、学び合いながら、越境的なプロジェクトを生み出す場としてリバネスユニバーシティは多様なコースを開発・運営しています。

特徴

1

「先生」はいない、自ら思考し、実践して知識を創る

リバネスユニバーシティには「先生」は存在しません。教えてもらうのではなく、自分で考えてやってみる。質問に答えるのではなく自ら問いを発する。これがリバネスユニバーシティでの学び方です。



特徴

2

ビジネスを共生型へシフトさせる「ブリッジコミュニケーション」の概念

市場を1から作っていくような活動においては、「伝える」ことができれば、その価値は認められず、仲間を集めることもできません。分断した向こう岸へ「橋」をかける強力な概念が必要です。

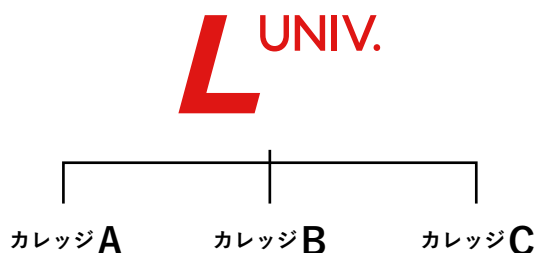


特徴

3

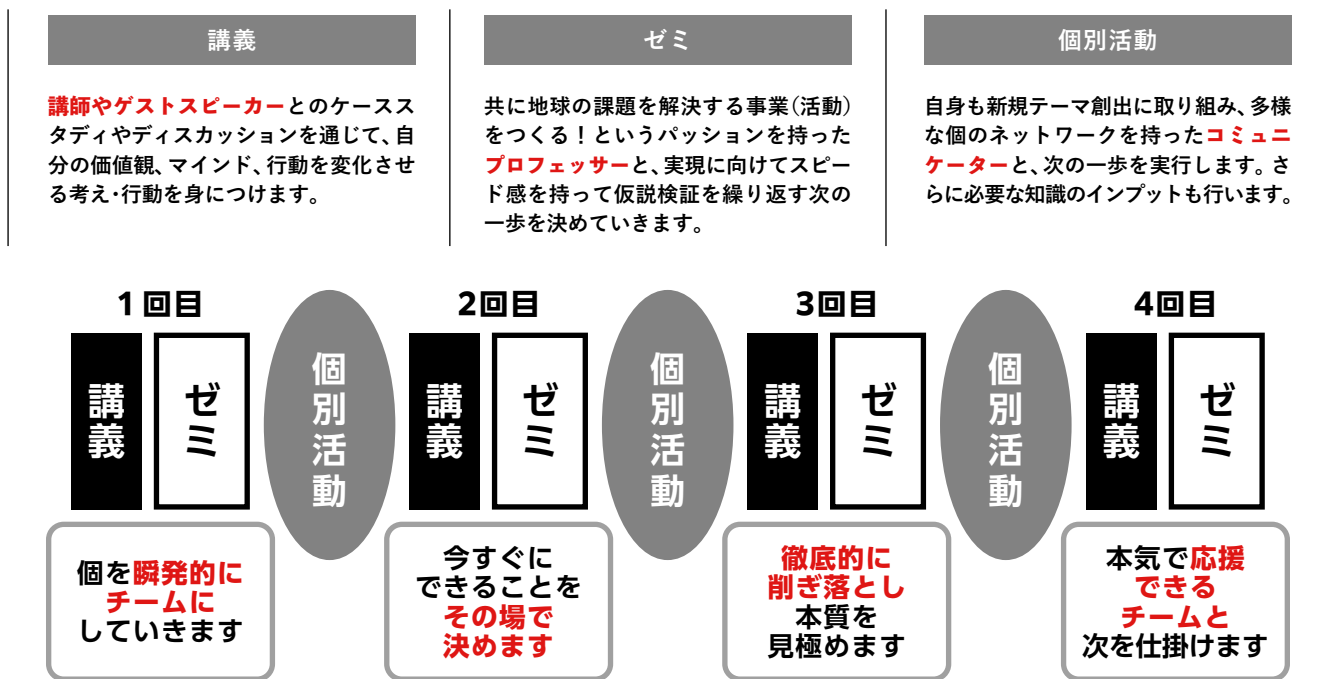
多様性のある学びを実現する「カレッジ制」

核となるカリキュラムと「地球貢献型リーダーの育成」という共通のゴールをベースとして、そこに各カレッジ主催企業のアセットを組み合わせることによって、多様性のある学びを実現します。



リバネスユニバーシティのコースの基本型

すべてのプログラムは「座学」ではなく、他流試合でチームを作り、地球貢献につながるプロジェクトを構想します。



参加者が得られるもの

自分の常識を変える

組織や肩書きを取り払い、異分野・異業種・異世代の全く異なる価値観・思考を持った人材が集まり、100年先の未来に思考を飛ばして「地球貢献」を本気で考え実践しながら自分の価値観、マインド、行動を変化させる。それがリバネスユニバーシティが開発・実施するコースです。

自社に「異分子」の思考を持ち帰る

「アジア最大級の中高生との研究プロジェクト」「超異分野学会」「テックベンチャーのエコシステムの開発」など、年間200以上のプロジェクトを創出する研究者集団リバネスが20年かけて蓄積した「ブリッジコミュニケーション」「QPMIサイクル」といった独自の概念を学びます。

新たに仕掛けるテーマに初速をつける

3~4ヶ月という短期間の中で、「仮説を立てて小さく試す」を繰り返し、具体的なプロジェクトを構想・実践するという実践型のプログラムです。コース受講は始まりであり、受講後に仕掛け続ける初速をつくる場です。そのプロセスの中で結果的に成長していきます。

リバネスユニバーシティが運営するコースの詳細はこちら <https://univ.lne.st/>



地球貢献型 リーダーズ

『地球貢献を実現する』ために必要なリーダーとは？
そんな大きな問いを掲げ、スタートしたリバネスユニバーシティ構想。
その中で立ち上げた各カレッジでは
異分野・異業種・異世代の人たちが集い新たな一歩を創り出している。

情熱に巻き込まれて 学んだ事業の進め方

吉次 優子 氏

DIC 株式会社
新事業統括本部 事業企画部 マネジャー



参加コース JRE STATION カレッジ エコテックコース2022後期

DIC に中途入社した当日に「研修を受けてください」とのみ伝えられ、「JRE Station カレッジ」を受講することになった吉次さん。同カレッジは月に2回、駅にあるキャンパスに異分野・異業種の企業人が集まり、4カ月かけてサステナブルビジネスの創出を行う学びの場だ。自社のことさえわからない状態で参加することになった彼女だが、カレッジを受講したことで多くの学びがあり、それが本業にも活かされているという。

新しい職場で抱えていた不安を カレッジが吹き飛ばしてくれた

米国の企業で働いていた吉次さんの専門は、機械工学。DIC への転職はキャリア上の大きな転換であり、挑戦だった。これまでとまったく異なる「感性」を切り口とした新規事業開発の業務。不確実性の高い状況の中で、どのようなアプローチで事業を推進していけばいいか、今まで培ってきた経験から何ができるか、さまざまな不安があったという。

カレッジでは序盤に、ビジネスを立ち上げ、推進していくためには自身の課題 (Question) と熱 (Passion) が重要であることを学ぶ。自分の内側から湧き出る

情熱が、行動を起こし、大きなことを成し遂げる原動力になるからだ。

吉次さんは同じ受講生の池上香織さん (JR 東日本 パーソネル サービス) のパッションに触れ、感銘を受けた。そしてこの人をサポートしたいと思った。いわば、池上さんのパッションに「巻き込まれ」たかたちだ。

プロジェクトの実現に必要な 人や企業を巻き込んでいく

池上さんは課題が明確だった。自らの実体験から、介護をしながら生活する人の健康管理を支援したいと考えていた。

一方、吉次さんは人々を快適にする空

間をつくりたいと考えていた。「介護をしながら生活する人が快適に暮らせる空間をつくる」という観点であれば、自分の知識や DIC のアセットも活かせるのではないかと。DIC のビジョンである「彩りと快適を提供し、人と地球の未来をより良いものに」をベースに、色彩と居心地を 触感、聴覚、嗅覚で体感できる空間づくりを実現したいと考えた。そんな思いを伝え、池上さんや他のメンバーとチームを形成した。

吉次さんたちのプロジェクトは、その後「睡眠でケア現場の“人”を守る」というテーマに発展。実現に向けて、睡眠関連データの収集と分析から始める必要があったため、人間の生理的なデータの計測・収集・分析に強い企業を巻き込んだ。

また、JR東日本も事故防止の観点から睡眠に関する取り組みをしていることがわかり、協力を依頼。カレッジ修了後もプロジェクトを推進し、現在、同社のシフト勤務者を対象に睡眠データの計測を実施するところまで来ている。

異分野との交わりが 大きな変化につながった

カレッジで吉次さんが感じたのは「人とのつながりの大切さ」だ。チームメンバーや他の受講者と積極的に交流を持つことで、異分野の人々とのネットワークができた。「こうやって仲間を集めるんだ、仕事をつくっていけばいいんだという学びは、自身の仕事の進め方にも大きな変化をもたらしました」。

分野を超えて人を巻き込み、時に巻き込まれていく力が、これからも彼女を駆動していくだろう。



吉次さんが仕掛けるプロジェクト

睡眠でケア現場の”人”を守る 「Universal Sleep Laboratory」プロジェクト

コア
技術

人を計測し、健康社会の一面を明らかにするAI（ヒューマノーム研究所）

メンバー

株式会社JR東日本パーソナルサービス
池上香織

DIC株式会社
吉次優子

株式会社リバネス
立花智子（コミュニケーター）

東日本旅客鉄道株式会社
上田佑斗（コミュニケーター）

株式会社ヒューマノーム研究所
佐藤牧人

※所属はプロジェクト発足時のもの（敬称略）

起案自身が夜間ケア（介護・看護・育児等）の当事者で、細切れ睡眠・慢性的な睡眠不足の中で、家族を大切に思う気持ちを見失う場面を経験しながら、生活をしている。こういった夜間ケアの現状は家庭内に閉じ、睡眠の改善を目指した製品・サービスを提供する企業や、医療・福祉・患者家族会といった支援者に届きにくく、いまなお有効な改善策を見いだせずにいる。本プロジェクトでは「信頼に足る知見をケア現場に届け、心身の健康を守る」をミッションに、原因に対応した改善策を収集、試し、改善をしていく。

まずは、夜間交代制勤務に従事するJR東日本社員に協力を仰ぎ、ウェアラブルデバイスを用いた現状調査と個々の工夫等のヒアリングを実施、睡眠の総量（長さ×質）と、リズム（バイオリズムとのズレ・補正状況）をフィードバックし、改善の起点を見出す。これらを通して、不規則な生活でも安心・安全を提供し続けている業種・職種の従事者と、夜間ケアの担い手・受け手に対して、より良い生活リズムの発見・発掘を提供する製品・サービスのプラットフォームの基盤を構築する。

地域の持続的な発展の プレイヤーとしての 銀行員の活躍を目指して

地域活性のハブとなる 銀行を目指して

私の所属する地方創生推進部では、ベンチャー支援、環境保全など、地域の持続的な発展とパートナーとの長期的な共創を目指した活動を行っています。銀行の法人営業の部署では、融資ができる経営基盤を作り、企業を成長させることが重要です。それはつまり、1年ごとの営業の成績などの視点でのお付き合いになります。しかし、これからの中長期的な地域の基盤の拡大、銀行としての価値向上を考えると、企業との1:1の関係だけに終始せず、5-10年先を見据えた「地域のための活動」を銀行自ら仕掛ける必要があります。地域課題解決の活動を銀行が牽引するのです。脱炭素のためのコンソーシアムを作るなど、率先してサステナブルな活動に取り組む部署として新しく今の部署ができました。銀行の新たな役割を担う人材の力をどのように定義し、高めるのかを知るために参加しました。

武田 憲和 氏

株式会社中国銀行 地方創生SDGs推進部 次長



参加コース ブリッジコミュニケーション(BC)コース・QPMIコース

相手に踏み込む重要性を体感した チーム活動

BCコースでは最初のチーム議論でなかなかお互いの理解や、踏み込んだ議論ができないように感じていました。オンラインで全く違う背景をもつ受講者同士の距離を縮めることは難しいのでは、と思っていました。しかし、チームメンバーの1人がチョコレートが好きとわかって、彼女の情熱に乗せられて、オンライン越しにチームで一緒にカカオからのチョコレートを作りました。その時は会話が弾み、最終的にはその体験を起点に分野が異なることを楽しみながら1つの企画を作っていくことができました。自己紹介や議論をしているだけではわからなかった相手のことが、チームメンバーの好きなことに一緒に取り組むことでより理解できるようになった瞬間でした。相手に関わり、懐に飛び込むことが「橋をかける」ことができるとわかりました。

支援者もリーダーシップを 発揮できる

銀行員である自分は研究者やベンチャーの経営者と異なり、自らが生涯かけて取り組む具体的なテーマを持っているわけではなく、それを応援する支援者でありたいと願っています。そんな中で自分も「地球貢献リーダー」になれるのだろうか、と考えてきました。しかし、チョコレート作りで相手の好奇心に素直に巻き込まれることができた経験から、相手の懐に踏み込んで一緒に汗をかく支援者になること自体が自分のテ

マになりうるのでは、と思い至りました。

これまでの銀行員のコミュニケーションは一步引くことが多く、「それは違う」、「こっちの方がいい」などの意見を言うことはあまりありません。あくまでも支援者だからです。しかし、銀行員にも経理や人事労務などのプロフェッショナルな知識があります。その視点から、対等に意見しあえる関係性を作り、一緒に目標に向かって進むことも必要なのではと考えるようになりました。異なる専門を持つ人たちの懐に自ら飛び込み、共感でつながる「ブリッジコミュニケーション」の考え方はまさにこれからの「支援者」の立場にいる銀行員のような人も身につけるべき考え方だと感じました。

地球貢献の輪を広げたい

この講座は1タームを受講して、頭で理解して完成ではない。そんな簡単なものではないぞ、と感じました。学んだことを日常で実践して初めて、成長があるのだと考えています。この講座で志を同じくして学んだ仲間たちとの繋がりも財産です。コース終了後もチームメンバーとはコミュニケーションをとっていますが、いずれ、地球貢献の目的のもとに全国で活動できる仲間ができることを期待しています。銀行は、まさに地域のさまざまな人をブリッジする存在であり、銀行員である自分の今の役割を通じて、ブリッジコミュニケーターとして活動していきたいです。今回一緒に学んだチームメンバーやこれから増えてくる修了生と一緒に、地域発の地球貢献を広げていけることを楽しみにしています。

創業期ベンチャー伴走の本質を追求し、
社会実装を先導する

2024年1月
新カレッジ
設立！

Germination COLLEGE

ジャーミネーションカレッジ

2022年11月、政府がスタートアップ育成5 年計画を打ち出した。現在、1.5万社を超えるスタートアップが立ち上がっており、その投資額はおよそ8,000 億円と言われている。冒頭の計画では、投資額を5 年間で10 兆円に引き上げ、数を10 万社にすることが掲げられており、そこからユニコーン企業を100 社創出していくことが最終的な目標として宣言された。いよいよ、ベンチャー支援のあり方が大きく変化する時代に入った。リバネスグループは、「科学技術の発展と地球貢献を実現する」をビジョンに掲げ、ディープテックベンチャー（以下「ベンチャー」と表記）の創業支援に力を入れてきた。この度、この計画の一端を担うプレーヤーとともに、今一度ベンチャー伴走の本質を追求し、社会実装を先導するファイナンスリーダーが活躍する世界の実現のため「ジャーミネーションカレッジ」を立ち上げる。その思いを、カレッジ長のリバネスカピタル代表取締役社長 池上昌弘氏が語る。

ジャーミネーションカレッジ長

株式会社リバネスカピタル 代表取締役社長 池上昌弘



2024年1月
新カレッジ
設立！

Germination COLLEGE

創業期ベンチャー伴走の本質を追求し、
社会実装を先導する
ジャーミネーションカレッジ



伴走者のリスクテイクが ベンチャーの成功確率を 高める

ベンチャーの成功確率をシンプルな形に因数分解すると、创业者のリスクテイク度と、投資家をはじめとする伴走者のリスクテイク度との掛け算であると言えます。创业者のリスクテイク度は、性善説で捉え100%であるとする、伴走者のリスクテイク度がそのままベンチャーの成功確率に反映されると言っても過言ではないでしょう。

ベンチャー創業期のファイナンスに焦点を当てると、ベンチャーと投資家や金融機関の間にはいくつかのギャップが存在します。ベンチャーは新しい概念と技術によって課題解決に挑むという特性から、多くの場合既存市場はなく、ある程度実証が進まないとビジネスモデルやマーケットを見出すのが困難です。例えば、今でこそ「腸内細菌」という言葉は多くの人が知るところとなりましたが、2010年代前半までは多くの人が「なにそれ？」という状況でした。一般的に投資起案や融資

稟議を通すには、蓋然性が高い事業計画があることが大前提であり、このギャップが投資家や金融機関のリスクテイクを難しくしています。

ベンチャーの創業期においては、資金以外にも経営人材や管理リソースなど不足している要素は多くあります。そんな現状の中、ベンチャー創業期における伴走者のリスクテイク度を高める打ち手を考え、主体的にリスクを抑えに動ける伴走者を増やす必要があるのでは、という結論に至りました。例えば、投資家や金融機関がもっと積極的にビジネスモデルやマーケットを共創する、その上で追加投資・融資を含め長期的に伴走し続ける。ベンチャーの中にいても、外にいても、経営者と同じビジョンを共有し、主体的に伴走できる人材をどんどん輩出しようと構想したのが、「ジャーミネーションカレッジ」です。

「研究シーズの芽出し」を支える応援団になる

「ジャーミネーション」とは「芽出し」という意味です。ベンチャーの出発点は、将来花開き実を結ぶ可能性が高くな

る種という意味で「研究シーズ」と表現されますが、その成長過程で最も重要なステップは「芽出し」です。また、投資の世界でも、課題を抱えた現場で PoC を実施し、PSF(Problem-Solution Fit)そしてPMF(Product-Market Fit)まで進んだあたりを「シードステージ」と呼びますが、特にディープテック領域のベンチャーはこの期間に投下する資金と時間が大きくなります。

そこで私たちは、先述したギャップに着目し、ある程度の PoC を実施し、初期ビジネスモデルやマーケットを見出す手前までのベンチャーが最も苦しみ期間を、「ジャーミネーション期」と定義しました。「ジャーミネーションカレッジ」では、このジャーミネーション期に最も力を発揮できる伴走者の輩出を目指します。

2024年1月
新カレッジ
設立！

Germination COLLEGE

創業期ベンチャー伴走の本質を追求し、
社会実装を先導する
ジャーミネーションカレッジ

ベンチャー支援の世界は 競争から共生へ

ここからは、またファイナンスに注目します。私たちは、ジャーミネーション期に資金面で支える投資家を「ジャーミネーションキャピタル」と名付けました。ベンチャー投資においては、経営者と株主、あるいは既存株主と新規株主の関係において利害対立が起きやすい構図になっています。また、注目されているベンチャーには資金が集まりやすく、投資家は有望な投資先を取り合うことになります。こう考えると、投資の世界は競争の世界であると言えます。

競争環境の存在は経済上否定すべきものではありませんが、ことジャーミネーション期の伴走においては、まずはベンチャーの芽をみんなで育てる、という共生型の考え方が必要となるのではないのでしょうか。例えば、リスクが高すぎるといきなりシャッターを閉めるのではなく、「こうしたら投資・融資しやすくなるから、一緒にお客様を回ろう」と動いてみる。結果として投資・融資できなくても、そういった動き方が互いの成長に繋がるはずです。さらに、ベンチャーと投資家の1:1の関係だけに閉じるのではなく、多様な強みを持つ投資家同士が横の連携を強化できれば、芽出しの成功確率も上がるのではないのでしょうか。

この仮説をもって、これまでリバネスグループでは国内外のべ120社超のベンチャーに500万円の小口投資をしてきました。仮説検証の中で、多くのベンチャーの「芽出し」の手応えを感じられたこともあって、「ジャーミネーションキャピタル」の構想に至ったのです。

投資の概念シフトを起こし ジャーミネーション期を 支える

資本主義の世界では、「ベンチャー投資の目的はキャピタルゲインを獲得すること」というのが常識です。しかし、ジャーミネーションキャピタルに求められるのは、「ともに汗をかき、課題解決に貢献する」とことであるという新しい常識です。これには、投資家あるいは投資機関のキャピタリストのみなさんの考え方に大きなパラダイムシフトを起こす必要があります。それには根拠となるベンチャーの課題の現場を体感する場が必要です。

もちろん、キャピタルゲインを無視しましょうという話ではなく、みなさんが主体的に投資先を巻き込んだ連携プロジェクトを作るなど、汗をかけた結果キャピタルゲインを創出する、という考え方に転換し

ていくということです。

概念シフトのために必要な考え方は、アントレプレナー側と大きく変わりません。1つは一人の強烈な課題感や情熱にどれだけ共感し、自分の思いを重ねられるかという、自分と向き合う力。そして、自社のアセットを真に理解し、自分自身が社内のアントレプレナーとして動く力。最後に、これまで競争関係にあった人たちの間に橋をかけ、仲間になれる力です。この3つを身につけながら、ジャーミネーション期の伴走を実践することで、ジャーミネーションキャピタルが生まれると考えています。「競争から共生へ」、そして「概念シフトを起こす」という2つの考え方は、リバネスユニバーシティのすべてのカレッジに共通するものです。ジャーミネーションカレッジでは、投資家やCXOの方へ向けたコースを通して、ベンチャーのジャーミネーション期に真に寄り添える伴走者を輩出することを目指します。



資金の出し手が主体的に汗をかき 投資先の成長を促す

ファイナンスブリッジコミュニケーターコース

「ジャーミネーションカレッジ」の第1弾として開講する

「ファイナンスブリッジコミュニケーター（以下、「FBC」）コース」が2024年1月より開講します。

どんなコース？ ベンチャーのCFOになりきって、コトを仕掛ける

FBCコースの最大の特徴は、金融機関・CVC等の担当者が、受講者として自身の所属組織の業務に加えて、あるベンチャーの「CFOになりきる」という点です。ファイナンスをわかりやすく伝え、ベンチャーと所属組織をブリッジし、主体的にコトを仕掛けられる人を、FBCとして認定します。受講者は、ベンチャーとのコミュニケーションの過程でファイナンスについてわかりやすく伝える力を磨き、ベンチャーの資金調達力の底上げを図ります。重要なのは、第三者視点で批評するのではなく、ベンチャー経営を自分事として捉え、自身の所属組織がもつアセットやネットワークを活用することによりベンチャーとの連携仮説を立案し、小さくとも具体的な一歩を実行することなのです。

どんな参加者が集まる？ フォロワー気質が強い人ほどFBCに向いている

「世界を変えたいとか特定の課題解決に対して、自分自身がチャレンジしたいわけではない」「だけど、今の仕事を通じて誰かの世界を変えるチャレンジに対して貢献したい気持ちはある」ファイナンスの領域に身を投じた人の中には、このような考え方をする人も多いのではないのでしょうか。そのような方にこそ、是非FBCコースを受講していただきたい。誰かの情熱を通じて社会に貢献したい、という情熱さえあれば、視点の切り替え方と一歩目の踏み出し方を身につけることで、主体性をもつ伴走者になることができるはずです。

コースの流れ

- 1 受講者個人のQuestion及びPassionを言語化する
- 2 受講者の所属組織のアセット・ネットワーク等を深掘り・言語化する
- 3 ベンチャー経営者とのコミュニケーションを経て、連携仮説を立案する
- 4 立案した仮説を具体的に実行し、必要に応じて仮説をアップデートする

コースの詳細

	第1回 2024年1月10日(水) 17～19時	第2回 2024年1月25日(木) 17～19時	第3回 2024年2月8日(木) 17～19時	第4回 2024年2月22日(木) 17～19時	第5回 2024年3月7日(木) 17～19時	第6回(最終回) 2024年3月21日(木) 17～19時
講義	ブリッジコミュニケーションの基礎を学ぶ					
	ブリッジコミュニケーション ➢ Germination概念理解 ➢ 地球貢献に必要な共感的 コミュニケーションと熱の 熱を源泉に発揮し続けるリ ーダーシップ	ABCDE理論 ➢アントレプレナーとのブリ ッジコミュニケーションに 必要な自社理解とマインド セット	宿題の発表・ディスカッション	宿題の発表・ディスカッション	宿題の発表・ディスカッション	宿題の発表・ディスカッション
ワーク	個を深掘りし発信する		ベンチャーのCFOになりきる			ラップアップ
	自分を知り、お互いを知る 個人のQPを探る 参加者一人一人の背景・興味 のバリエーションを共有する	自社のABCを紐解く どのようなアセットがあるか どのようなビジネスモデルが 本質的な顧客は誰か	対象会社の事業を理解する CFOとなるベンチャーのビジョ ン・技術・事業を理解する 自らが経営陣の一角としてプレゼ ンテーションする	自社のABCから 具体的な連携仮説を立てる 対象ベンチャーのビジネスモデル 確立や販路拡張につながる連携 の仮説を立てる	連携仮説実践の振り返り 前回からの継続 事業計画をアップデートする 余裕があれば連携がうまくいった と仮定して事業計画に反映する	まとめ これまでの取り組みからの気づ き・学びをまとめる 今後どのようなリーダーとなりベ ンチャーと関わるか宣言する
宿題	自己紹介 QPシート	ABCシート	チームビルディング ロジックモデル	連携仮説シート	連携仮説シート 事業計画	振り返りシート
	フィードバックを元に QPを深掘りする (QPシート完成)	フィードバックを元に ABCを深掘りする (ABCシート完成)	連携先になり得る企業を 自社のアセット・ネットワーク から発掘する	ディスカッションを元に 連携仮説を具体化・実践する (連携仮説シート完成)	ディスカッションを元に 連携仮説を継続実践する (連携シートアップデート)	

L^{UNIV.} 人材開発論

誰もがコトを起こすリーダーになれる

自分の『当たり前』を逆流させ、常識を変える

「常識を変える」というと、他者を変えるようなイメージを持つ方も多いかもしれませんが、ここでの話は「自分の常識を変えること」です。自分の常識を変えれば世界が一気に広がり、できることが変わります。たとえば、「お金をもらって働く」というのがこれまでの常識でした。ところが最近では「お金を払って働く」という逆転が起こり始めています。たとえばエンジェル投資家はその一人といえます。ベンチャー企業に投資し、さらには資金面以外にもそのベンチャーのために自分の時間や知識を提供して支援することもあります。これが、これからの働き方になるかもしれない。そう考えると「仕事」に対

する考え方が随分と変わってきませんか？他にも「先生が生徒に教える」というのも今や古い考えになり、「大人が子どもから学ぶ」という逆流が起こり始めています。たとえばユーグレナ社のCFOの制度を知っていますか？「Chief Future Officer」の略ですが、それを高校生にやらせてもらうという取り組みです。もちろんこれは大人が子どもに提供する社会経験プログラムではありません。彼らの視点から未来をどうしたいか、どんな世界にしたいかを発信してもらい、大人は彼らの感性から発せられるアイデアから学びます。そして、一緒にそのアイデアを実現していくというチャレンジなのです。

リバネスが出前実験教室を始めた当時、世の常識は「教育参加はボランティア活動」もしくは「謝金をもらってやるもの」でした。しかし、「大人が子どもから学ぶ、これは人材育成なんだ！」と思考の転換をした瞬間に、「企業が社員の育成費としてお金を払って子どもの教育参加をする」という新しい常識が生まれたのです。このような事例を聞いてどう思いますか？今、みなさんが所属している組織の常識では新しい事を自分の意志で仕掛けることができないと感じていることがあるかもしれません。しかし、自分の『当たり前』を逆流させてみると、今まで見えなかったやり方がまだまだ見つかるはずです。

ブリッジコミュニケーションの教科書ができました！



『誰もが「地球貢献型リーダー」になれる思考法』

【出版社】リバネス出版(株式会社リバネス) 【価格】2,000円(税抜)

【著者】楠 晴奈 【コラム】西山 哲史・石澤 敏洋・藤田 大悟・岡崎 敬

- 第1章 地球貢献型リーダーは「サイエンスブリッジコミュニケーター」
- 第2章 さあ、はじめよう！トレーニングに必要な4つの心構え
- 第3章 自らコトを起こす考え方や行動を学ぶー誰でもできる、5つの思考の変化ー
- 第4章 仲間を集める方法を学ぶー「話せる・書ける」を支える4つのスキルー
- 第5章 仲間を集める方法を学ぶー「子ども」を仲間にする2つの挑戦ー
- 第6章 リーダーとなって動き続けるテーマを決めるー3人の仲間を集める旅ー

アセットをフル活用し、 プロジェクトを生み出す 「カレッジ」

Germination COLLEGE

[Webサイト] <https://univ.lne.st/>



ジャーミネーションカレッジ

主催

株式会社リバネスクピタル

ミッション

ベンチャー伴走の本質を追究し、
社会実装を先導する

設立の思い

ベンチャーの成功確率をシンプルな形に
因数分解すると、創業者のリスクテイク度
と、投資家をはじめとする伴走者のリスクテイク度との掛け算である
と言えます。創業者のリスクテイク度が100%であるとする、
伴走者のリスクテイク度がそのままベンチャーの成功確率に反映
されると言っても過言ではないでしょう。しかし、ベンチャーは新
しい概念と技術によって課題解決に挑むという特性から、多くの場
合既存市場はなく、ある程度実証が進まないとビジネスモデルやマー
ケットを見出すのが困難です。一般的に投資起案や融資稟議を通す
には、蓋然性が高い事業計画があることが大前提であり、このギャ
ップが投資家や金融機関のリスクテイクを難しくしています。
ベンチャーの創業期においては、資金以外にも経営人材や管理リソー

スなど不足している要素は多くあります。例えば、投資家や金融機
関がもっと積極的にビジネスモデルやマーケットを共創する、その
上で追加投資・融資を含め長期的に伴走し続ける。ベンチャーの中
にいても、外にいても、経営者と同じビジョンを共有し、主体的に
伴走できる人材をどんどん輩出しようと構想したのが、「ジャーミネ
ーションカレッジ」です。本カレッジでは、資金調達・経営人材・経営
管理という観点で伴走に必要な考え方を共有し、実践する場を通じ
て、受講者それぞれがベンチャーに対して主体的な伴走者として動
き出すことを目指しています。

(リバネスクピタル 代表取締役社長 池上昌弘 2023年10月
ジャーミネーションカレッジ設立講演より)

3つの特徴

ブリッジコミュニケーション

未知の相手と共感をつくり、強固な関係
性を構築してコラボレーションできる
テーマを生み出す方法を徹底的に学び、
実践します。

QPMI サイクル

QPMI サイクルは Question、Passion、
Mission、Innovation の頭文字を取った
ものです。個が挑みたい「問い」と行動
し続けるエンジンとなる「熱」を掘り下
げます。

伴走者のリスクテイク

伴走に必要な考え方を共有し、実践す
る場を通じて、受講者それぞれがベン
チャーに対して主体的な伴走者として
動き出すことを目指します。

実施コース (2023年12月現在)

ファイナンスブリッジコミュニケーションコース

ジャーミネーションカレッジから生まれたプロジェクト

2024年1月よりコースを開講し、参加者とともにベンチャー伴走に取り組みます。

リバネスユニバーシティーは、変化を本気で考える企業とともに、参加者の概念シフトを起こす「カレッジ」の開発に取り組んでいます。カレッジには多種多様な企業の人材が参加し、4ヶ月間、全く違う文化の中で、地球の課題解決に繋がるビジネス・プロジェクトの創出に取り組みます。核となるカリキュラムと「地球貢献型リーダーの育成」という共通のゴールをベースとして、そこに各カレッジ主催企業のアセットを組み合わせることによって、多様性のある学びを実現します。今後も新たなカレッジを設立してまいります。

[Webサイト] <https://jre-station-college.jp/>



JRE STATION カレッジ

JRE Station カレッジ

主催

東日本旅客鉄道株式会社

ミッション

異業種・異分野の社会人が駅に集い、
サステナブルビジネスをつくりだす

設立の思い

これからの日本が世界をリードしていくためには、やはり「世のため人のため」をしっかりとやり続けることが大切だと私は感じています。そうした中で、JR東日本としても、どうすれば持続可能な社会の実現に向けて役に立つことができるだろうかということを考えて企画したのが、今回のJRE Station カレッジです。JRE Station カレッジは、地域の拠点である駅をキャンパスとして、課題発掘型のリーダー人材を育成し、サステナブルビジネスを生み出すための学び場です。年齢、業種、立場を超えて、誰もが知識をアップデートし続け、課題意識と情熱でつながる人財のネットワークを増幅させ、地域の課題を持続可能な形で解決するエコシステムの構築を目指します。JRE Station カレッジは東京駅キャンパスからスタートします。

東京駅は、当時の人々の「世界に誇れる駅をつくるんだ」という高い志と多大な努力によって、1914年に創建されました。その記録を読みますと、身震いするような感動を覚えます。まさに今こそ、我々自身も、次の100年後の人々にそのように感じてもらえるような仕事をしていく必要があります。その象徴的な存在である東京駅をキャンパスとして、次の100年、200年先の未来につながるサステナブルなビジネスをクリエイティブにしていきたいと思っています。

(JR東日本 常務執行役員 表 輝幸氏※2021年10月JRE Station カレッジ開校時時点
2021年10月エコテックコース初回講義より)

3つの特徴

駅

地域の拠点である駅をキャンパスとして、多種多様なバックグラウンドをもつ個人のネットワークを形成し、わずか4カ月で新たなビジネスの種をつくりだします。

サステナブル

これからの時代のビジネスに不可欠な「サステナブル」の考え方と同時に、ゲストスピーカーとして登壇するディープテックベンチャーから最先端の知見を学びます。

ビジネス創出

本カレッジは単にプロジェクトのプランを構想するだけでなく、JR東日本のアセット（駅・まち・フィールド）を実践・実証の場として活用し、ビジネスを実際に創出します。

実施コース（2023年12月現在）

エコテックコース / フードテックコース / ライフテックコース

JRE Station カレッジから生まれたプロジェクト

● Frontier Garbageを用いたアップサイクルプロジェクト ● 農地を使わない天然繊維、MossFiber開発プロジェクト ● 中高生活動家と企業がつながるプラットフォーム「活動家」ラボプロジェクト ● コーヒー文化を楽しみながら生産現場を守る「東京コーヒー栽培」プロジェクト ● 海の多様性を守り日本食の文化を継承する「促成昆布製造」プロジェクト ● シークワサーの搾りかすで妊婦を救う「つわり軽減」プロジェクト ● 海藻を育て活用することで豊かな海を育む「海藻コンシェルジュ」プロジェクト ● 睡眠でケア現場の“人”を守る「Universal Sleep Laboratory」プロジェクト

2024年度開講コース一覧



リバネスユニバーシティーは各カレッジがコースを開発し、実施しています。

※リバネスユニバーシティーは、学校教育法上で認められた正規の大学ではありません。

※各コースのプロデューサー・日程・会場は変更となる場合があります。最新情報はWebページをご覧ください。

コース詳細はこちら

<https://univ.lne.st/courses/>

共通必修コース

ブリッジコミュニケーションコース

実施期間 2024年6月18日～8月27日（火曜開催：17:00-19:30・全7回）

概要 異分野・異世代の相手と「共感」をつくり、100年先の未来に思考を飛ばした「地球貢献型プロジェクト」を構想します。自分の価値観、マインド、行動を変化させ、自分の常識外のコトを仕掛けるために必要な「ブリッジコミュニケーション」の概念を学びます。

最終プレゼン課題

プロジェクトの実現に必要な次世代教育を考え実践する

参加費 495,000円

実施場所 オンライン

（初回と最終回のみリバネス東京本社で開催）

プロデューサー

武田 隆太

株式会社リバネス 国家政策研究センター センター長

米国オハイオ州立大学にて植物RNA病原体に関する研究を行い、Ph.D. 取得。2011年よりリバネスアメリカの立ち上げに参画し、2012年にリバネスに入社。人材開発事業部部長、国際開発事業部部長、グローバルブリッジ研究所・所長を歴任。2013年以来、国内でシードアクセラレーション事業として立ち上げた「TECH PLANTER」の海外展開を推進。現在は海外のベンチャーエコシステムのキープレイヤーのネットワークを活かし、東南アジア諸国の政府系機関やベンチャーと連携した事業立ち上げに携わる。

Germination
COLLEGE

ジャーミネーションカレッジ開講コース

ファイナンスブリッジコミュニケーターコース

実施期間 2024年1月10日～3月21日（木曜開催：17:00-19:00・全6回）

概要 受講者が所属する金融・投資機関のアセット・ネットワークを活用したベンチャーとの連携仮説を立て、ビジネスモデルの拡張・共創の可能性を探ります。ベンチャーの創業期の支援に必要な投資の概念をアップデートし、創業期のベンチャーとのコミュニケーションのあり方を学びます。

最終プレゼン課題

CFOになりきって立案したベンチャーとの連携仮説とその実践

参加費 495,000円

実施場所 リバネス東京本社

プロデューサー

池上 昌弘

株式会社リバネスキャピタル 代表取締役社長

光合成細菌の研究で大学院に進学後、丸・井上と出会い2人の熱に巻き込まれるようにしてリバネス創業に関わり、出前実験教室の初代講師を務める。創業後大学院を中退し初の常勤役員となるが、「誰もやらない」という理由で経理・財務などコーポレート部門を一手に引き受ける。この20年間で70社超の研究開発型ベンチャーの創業期をサポートしてきた経験を活かすため、子会社のリバネスキャピタルを設立し組織的なベンチャー支援体制を構築中。

新カレッジ設立予定！

ラーニングクリエイターコース

実施期間 2024年10月25日～2025年1月31日（金曜開催：17:30-20:00・全7回）

概要 「ラーニングクリエイター」は多様な視点を持った人と人が互いに学び合う「豊かな学びの場」をクリエイティブできる人材です。今回は、墨田区・押上を実践フィールドとして「墨田区の街のにぎわいづくり」につながる「学びの場づくり」に挑む、実践的なコースとなっています。

最終プレゼン課題

大人と子どもを巻き込み「まちのにぎわいづくり」に繋がる教育プログラムの企画提案

協賛 東武不動産株式会社

実施場所 オンライン

（初回・中間報告会・最終回は東京都墨田区内で開催）

プロデューサー

前田 里美

株式会社リバネス 教育総合研究センター長

高校を卒業後渡米。Wright State Universityで人間工学心理学の修士、博士号を取得。2010年にリバネスに入社。若手研究者向け研修、教員研修、中高生の国際教育企画の開発に従事。2018年4月から、リバネス教育総合研究センターのセンター長として、非認知能力の評価系と育成の研究を、学校現場の先生方と一緒に取り組む。

JRE^{STATION}カレッジ JRE Station カレッジ開講コース

エコテックコース

実施期間 2024年9月4日～12月18日(水曜開催:18:00-20:30・全8回)

概要

既存の産業は資源が維持されることを前提としており、崩壊がすでに始まっています。このコースでは、現状を打開し、水質浄化や廃棄物循環、災害対策といったサステナブルな地球環境の実現を目指します。

最終プレゼン課題

投資家の心を動かすプレゼンテーション

参加費 495,000円 **実施場所** 東京駅キャンパス(STATION DESK 東京 premium)

プロデューサー

楠 晴奈

株式会社リバネス 人材開発事業部 部長

2003年よりリバネスに参加。教材開発事業部、教育開発事業部、人材開発事業部の部長を経て2016年研究キャリアセンター長に就任。リバネスの教育応援プロジェクトの立ち上げ、企業の教育参加を加速する教育CSR事業の創出に関わる。また、リバネスの人材開発の根幹となるサイエンスブリッジコミュニケーター育成を主軸とした企業・大学の人材育成プログラムの開発・実施経験を豊富に持つ。著書『誰もが「地球貢献型リーダー」になれる思考法(リバネス出版)』

フードテックコース

実施期間 2024年9月9日～12月23日(月曜開催:18:00-20:30・全8回)

概要

食べることは人が必ず必要とする行為。人類の歴史の中で食を起点にさまざまな文化や価値が生まれてきました。しかし、いま食料資源の枯渇、フードロスなど食の問題が数多く存在しています。このコースでは「新しい食の循環」をテーマに、ビジネスを生み出します。

最終プレゼン課題

投資家の心を動かすプレゼンテーション

参加費 495,000円 **実施場所** 新大久保駅キャンパス(K,D,C,,)

プロデューサー

塚田 周平

株式会社リバネス 執行役員

東京大学大学院農学生命科学研究科応用生命工学専攻博士課程修了。博士(農学)。設立初期の2003年よりリバネスの運営に参画。実験教室、各種ライティングの実践を積んだ後、アグリ分野の先進技術開発・導入、地域創業エコシステム構築事業の立ち上げを行う。大手・中堅企業やベンチャー、研究者等との連携による技術開発、事業開発に現場主義でコミットしている。

ライフテックコース

実施期間 2024年9月3日～12月17日(火曜開催:18:00-20:30・全8回)

概要

生活スタイルや考え方の変化に伴い、性別、世代、国籍などの垣根を超え多様性を受け入れながら、個々の豊かな人生について考えることが重要になっています。ここでは医療、福祉、教育、働き方などの視点から、これからの人の暮らしにまつわる事業を構想します。

最終プレゼン課題

投資家の心を動かすプレゼンテーション

参加費 495,000円 **実施場所** 高輪ゲートウェイ駅キャンパス

プロデューサー

井上 浄

株式会社リバネス 代表取締役社長 CCO

東京薬科大学大学院薬学研究科博士課程修了、博士(薬学)、薬剤師。博士過程を修了後、北里大学理学部助教および講師、京都大学大学院医学研究科助教、慶應義塾大学特任准教授を経て、2018年より熊本大学薬学部先端薬学教授、慶應義塾大学薬学部客員教授に就任・兼務。研究開発を行いながら、大学・研究機関との共同研究事業の立ち上げや研究所設立の支援等に携わる。多くのベンチャー企業の立ち上げにも携わり顧問を務める。

カレッジから生まれた プロジェクト



プロジェクト一覧はこちら

<https://jre-station-college.jp/project/>

各カレッジでは超実践型のゼミを通し、地球貢献に資する新たなプロジェクトを受講生自らが生み出します。さらには、講座修了後も、受講生や、カレッジ主催企業、そしてリバネスのアセットを活用し、プロジェクトの社会実装を目指します。

最新プロジェクト紹介

※メンバーは所属を含めてプロジェクト発足時のもの

JRE STATION カレッジ エコテックコースより

塗装における、人・環境負荷を低減する 「サステナブル塗装」プロジェクト

塗装業界は製造過程に排出する廃液やミストによって地球環境へ影響を及ぼしている。同時に溶剤やミストは塗装従事者にとっても体に負荷のかかるものであり、地球環境と人両方に対して改善余地のある産業と言える。また、工場塗装には中小企業が多く、そのほとんどがクリーンルーム化などが難しい状況であることもこの問題を悪化させる要因となっている。さらに、塗装現場の静電気などによる塗装不良も発生し、製造過程で廃棄することも少なくない。そこで本プロジェクトでは、これらの課題を解決するために、中小企業でも導入可能な簡易かつ安価な塗装技術・環境の開発を行い、塗装業界の労働者と地球への優しさを追求する。

メンバー

マイスターズグリット株式会社 笹井 克太郎
株式会社フジタ 久保田 洋
東日本旅客鉄道株式会社 久保田 亮
株式会社リバネス 海浦 航平（コミュニケーター）



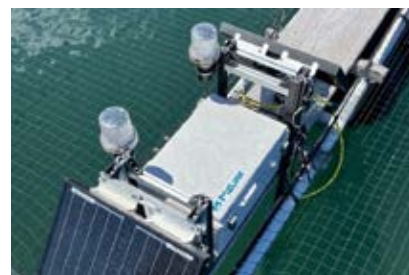
JRE STATION カレッジ エコテックコースより

海洋研究を促進し環境保全と経済発展を 両立する「海の見える化」プロジェクト

海は地球の7割を占めており、地球の環境的にも産業的にも大きな影響力を持つにもかかわらず、海全体の9割を占める水深200m以下のことは未解明であり、人類は地球のことをまだ約4割しか知らない。そのため、我々は海を可視化を通して地球全体を可視化し、地球環境の保全と発展を両立するための持続可能な海洋開発を実施する。具体的には、(1) 海洋測定技術開発（水質等の測定解析）、(2) 水産技術開発、(3) 水産資源管理技術開発、(4) 資源・エネルギー開発（鉱物資源や洋上風力発電等）、(5) 価値評価系開発（CO₂吸収、生物多様性の保全の評価）、(6) 教育普及・文化醸成開発（海洋教育）の6つの観点から研究開発プロジェクトを立ち上げる。様々なバックグラウンドを持つ人を巻き込み海の理解を深めていき、海洋開発のためのプロジェクトを生み出すプラットフォームになることを目指す。

メンバー

株式会社MizLinux 野城 菜帆
株式会社OUTSENSE 高橋 鷹山
株式会社リバネスキヤピタル 阿部 晃城
株式会社リバネス 西山 哲史
株式会社リバネス 立花 智子（コミュニケーター）



JRE STATION カレッジ エコテックコースより

突出したこだわりを持つ仲間と新規ビジネスを加速する「熱狂人採用」プロジェクト

スタートアップなど、新しい事業が生み出されるところでは、これまでにない価値や技術を持つ人材が活躍している。最適な人だ付けにこだわりを持って製品開発ができる人材、美しく機能性のある塗装を追求する集中力のある人材、人の手を加えずに、いかに生き物だけのチカラでサステナブルな状態で水場環境を再現するか追求する人材。これらは新しい技術開発の中で活かされるチカラであり、決められた業務をこなせるかどうかといった基準だけでは見落とされがちだ。そこで、本プロジェクトでは、自ら気になったことを探求したり、工夫を続けてしまうような、なにかに没頭し、熱狂する「熱狂人材」を発掘、採用することを目指す。「熱狂人材」の明確な定義づけと再現可能な採用に取り組み、スタートアップを始め、これまでにないビジネスの中に未だ定義されていない価値や視点を導入するとともに、熱狂人だからこそ可能な新しい技術の開発を通して、ビジネス開発と加速につなげる。

メンバー

株式会社イノカ 竹内 四季

株式会社みずほ銀行 木村 拓海

株式会社山下PMC 和田 修和

株式会社リバネス 伊達山 泉（コミュニケーター）



プロジェクト活動レポート

野菜粉末アップサイクルプロジェクト

JRE Station カレッジ2022年のエコテックコースから生まれた「野菜粉末アップサイクルプロジェクト」では、野菜残渣を活用したアップサイクル商品の開発に取り組んでいます。本プロジェクトと連携しているベンチャー企業、株式会社グリーンエースでは、野菜の色や香り栄養成分をそのまま保持した野菜粉末を活用した「野菜パン」を開発、2023年10月に、JR東日本のグループ会社である株式会社ルミネが運営するルミネアグリマルシェに出店し、首都圏マーケットでの「野菜パン」の販売を行いました。今後、ルミネアグリマルシェでのお客さまの声をもとに商品や販売アプローチの検証を行います。お客さまとのコミュニケーションを通じて野菜粉末の認知向上および市場を創出し、廃棄野菜を活用したサステナブルな食の循環に繋げていきます。

「野菜粉末アップサイクルプロジェクト」について

廃棄野菜を多用途へのアップサイクルが可能な資源として捉え、フードロス削減に貢献することを目指しています。優れた野菜粉末化技術をもつ株式会社グリーンエースと連携して商品の開発を行い、野菜粉末の認知向上および市場を創出し、廃棄野菜を活用したサステナブルな食の循環に繋げていきます。

株式会社グリーンエース

「農産物の力で生活をもっと豊かに」をビジョンに、野菜粉末化技術を活用した商品を製造・販売し、廃棄農産物問題の解消を目指しています。2018年に代表取締役中村 慎之祐が山形県酒田市で創業。



スキルアップではなく「生き方」を考え、ビジネスを生み出す場を創る

「パートナー企業」を募集しています

参加方法

1 社員を開講コースに送り込む

各カレッジが実施するコースやリバネスユニバーシティが独自で開講する「ブリッジコミュニケーションコース」は1企業各コース2名まで派遣が可能です。

実施例1

手上げ制研修の対象にして「本気の人」を送り出す

受講企業の声

特定部署の社員のみでなく役員から新入社員までの全社員から受講希望者を募り、受講者を決定しています。選抜は、「サステナビリティ視点で自身が解決したい社会課題と、それを自社のアセットを使ってどのように実現したいか」「前の質問で挙げた課題を実現したいと思ったきっかけや原体験」「自身のアピールポイント」の3テーマを盛り込んだレポートによって行っています。さらに、カレッジ修了後、その結果を担当役員の前でプレゼンテーションする「報告会」を実施しています。

実施例2

短期の「ベンチャー出向」と捉えて、次のリーダー候補を送り出す

受講企業の声

ベンチャー的なスピード感のある文化の中で、普段触れ合わない業界の方々と具体的なプロジェクトを生み出していく場はまさに「ベンチャー出向」のような感覚です。長期の出向は多くの社員を送り出すことは難しいですが、4ヶ月の短期間で本業と並行しながら実施できるため、より多くの社員にチャンスを提供できると感じています。

参加方法

2 カレッジ設立企業となって場をつくる

次の100年、持続可能なビジネスをつくるために各社が掲げるコンセプトを実現するには必ず「人づくり」が必要です。本業の価値観から一歩外に飛び出した「場」をつくり、ステークホルダーとともに、「人を育て、具体的な行動・活動を生み出すカレッジ」を開発しませんか。

カレッジ開発の流れ

- 1 カレッジの哲学の設計
- 2 実施するコースの設計
- 3 コースのプレ実施
- 4 本格開講

お問い合わせ/お申し込み | [担当] 楠 / 渡辺 / 立花 [E-mail] hd@Lnest.jp

L UNIV. 参考書籍



世界を変えるビジネスは、
たった1人の「熱」から生まれる。

日本実業出版社 丸幸弘 著

『一人ひとりの社員が強い「熱」(passion)を持って動いてぶつかり、互いに化学反応を起こし合う状態を集団化することで、世界を変えるイノベーション企業になれる』科学者集団リバネスの社員が個の熱を起点にイノベーションを起こす組織のしくみを紹介した一冊です。



「勘違いする力」が世界を変える。

リバネス出版 丸幸弘 編

1人ではただの勘違い。2人になったときには迷いが生じる。3人いれば勘違いを軌道修正し、「勘違いする力」となり、更に大きくふくらませることができる。それがイノベーションの原動力になる。



誰もが「地球貢献型リーダー」に
なれる思考法

リバネス出版 楠 晴奈 著

自分の価値観、マインド、行動を変化させ、自分の常識外のコトを仕掛けるために必要な「ブリッジコミュニケーション」の考えをまとめた一冊です。自分一人ではできないような大きな課題の解決のために行動を起こしたいと思っている方へは、「地球貢献型リーダー」とは何かを、本書を通じて一緒に考えましょう。



Deep Tech
世界の未来を切り拓く「眠れる技術」

日経BP 丸幸弘・尾原和啓 著

必ずしもハイテクである必要はなく、例えば、日本では眠っているローテクの組み合わせでも解決できる課題は地球上に数多く存在します。本書では、ディープイシューの解決に資するテクノロジー群およびその活動のことを「Deep Tech(ディープテック)」と位置付け、いま世界で起きている潮流をケーススタディとともに紹介します。

L UNIV. Leave a Nest University

